

# 動物考古学研究とエジプトにおけるフィールドワーク

北川 千織

学振特別研究員PD

## 1. はじめに

### 研究分野

遺跡からは、土器・石器など過去の人間が使用した様々な遺物が出土し、その中のひとつに動物遺体があります。遺跡に住んでいた人々が食べて捨てたゴミから、過去の人間の食生活だけではなく、より広範な（例えば経済、社会、宗教に関する）情報を引き出そうというのが、考古学の中で「動物考古学」と呼ばれている分野です<sup>1)</sup>。動物遺体を扱う研究者の中には、大きく2タイプあり、ひとつは、特定地域を狭く深く研究しその地域での時間軸上、及び地域内差を追究するタイプ、もうひとつは、様々な地域の動物遺体から人間と動物の関わりのパターンを横に比較研究するタイプです。筆者の場合は、現在のところは主に前者の立場で研究しており、エジプトをフィールドにしています。

### 研究目的と方法

遺跡から出土した動物遺体は、クリーニングとフローテーションが行われた後、骨格部位や種が同定されます。遺跡から出土する骨は多くの場合が食べ物の残渣になりますので、解剖学的な位置を保っていないことが殆どである上に、堆積後から発掘されるまでに踏みつけや雨風による風化、土壌状態、動物（犬・齧歯類など）による齧りなどから破損しています。そのため、直ぐに同定できる特徴を残している資料もありますが、現生標本を取り出してきて比較して同定できる資料、同定不可能な資料も出てきます。同定と並行しつつ、または次にこれらの資料を記録します（部位、種、左右、破損状態、骨端の癒合状態、歯の磨耗状態、病理、齧り、解体・加工痕、焼成痕、性別・年齢（わかれば）、重量、その他の所見など）。また、計測可能な資料は計測します（von den Driesch 1976）。計測は重要な作業で、動物の大きさの遺跡内の差（雄・雌）、他地域との差、野生と家畜の大きさの差（家畜化の過程で動物は小型化しますので）、種を見分ける

指標にもなります。加工痕や病理など何か特徴が見られた場合は写真や実測も加わります。次の段階では、データをPCに入力（第1段階で並行して入力していない場合）し、データの分析に取り掛かります。

データの分析をしていくにあたり、動物遺体から分かる事をもう少し詳しく紹介します。動物遺体は食物残渣であれば、一番わかりやすいのは何を食べたかという事柄です。動物種からは、種の相対比率（骨破片数と重量）が読み取れます。それは嗜好に起因する場合も、そうでない場合もありますが、種の相対比率の変化から、狩猟から家畜化への変化の過程、家畜の利用種の変化を復元できる場合があります。変化した場合、何故それが起きたのか（嗜好の変化、宗教的要因、自然環境の変化、獲得手段・技術の変化など）を考察します。骨格部位の分布からは、もし分布に偏りが有った場合は、遺跡内での肉の分配についての手がかりとなる場合もあります。また、関節の癒合や歯から推定される年齢や、計測データや形態による性別判定から、動物の死亡パターンを読み取り、どのような性別・年齢グループがより消費されていたのかグラフに死亡曲線を書くことも可能です。歯や貝の成長線、鳥（渡りのある鳥を扱う場合）、魚類遺体から動物利用の季節性が復元できることもあります。解体痕が有る場合は、その遺跡で行われた動物の屠畜・解体方法を復元することができるかもしれません。

何を食べたかという問いだけではなく、場合によっては動物の二次利用に関して理解を深めることが可能です。ミルクや毛などの動物由来資源の利用は世界各地で見られます。毛に関しては、毛織物が遺物として残っている場合は明らかですし、毛そのものが残存していない場合でも、前述した様に動物の死亡パターン（年齢・性）を分析することにより、明らかになることもあります。革製品・骨角器なども皮・骨・角などを原材料として作られます。どのような動物の、どの部分が利用されたかというのも興味深い点です。骨に病理が見られた場合は、その動物がどう利用されていたか——例えば使役獣だったのか、または飼育状態な

ども垣間見ることができます。使役動物は、脚関節に関節炎が観察されることがありますし、こちら（使役獣かどうか）も死亡パターンから分かることがあります。

さらに分析を進めることにより、次のようなことも理解できるかもしれません。動物の骨格部位には、それぞれ肉の多い部分と少ない部分がありますので、遺跡内の例えばA区で肉量の多い部位の骨が多く見つかり、離れたB区からは肉量の少ない部位の骨ばかり出土したら、遺跡内での分配・階層の差と関連しているかもしれません。また、骨角器・革製品からは、専門化された集団が存在した社会であった場合、工房の遺構や、生産組織・技術などの情報も得られる可能性があります。

古代エジプトでは動物も神格化されていたので、動物も宗教を理解するヒントになりえます。逆に禁忌となる動物もいました。当時の社会、またはその一部における動物に対する思想を理解すること、場合によっては文字資料に書かれた思想と現実のギャップを出土動物遺体から読み取ることも課題の1つになります。

出土動物相から古環境の推定も可能かもしれません。例えば古代には出土するナイル淡水魚で、現在はその辺りには生息しない種があるのも一例です。これ

は哺乳類の幾つかの種にも言えることです。遺跡地域に存在しない生態の動物が、突然出土することもあります。エジプト史の中で、動物交易は度々見られます。動物交易とその他の交易が当時の国際関係を理解するのに役立つこともあります。

動物遺体から分かることは、単に何を食べたのかという問題だけでなく、もう一步踏み込んでみると、骨を通して人間と動物が関わってきた社会の復元が多かれ少なかれ可能なのです。

## 2. フィールドワーク

現在のフィールド調査は殆どがエジプトですが、その他には日本での発掘とトルコ・ドイツでの動物遺体分析もしました（図1）。日本の発掘では動物遺体そのものを分析した事はなかったのですが、調査方法や実測など、技術的な面で学んだ事が多かったです。エジプトで調査を始めた時にそうした経験が現場で役に立ち、日本にいる間にそれらを身につけておいて良かったと感じました。

### エジプトでのフィールド調査

これまで調査に参加した遺跡は、図2・表2に示した9遺跡になります。出土動物相は立地、時代、遺跡



図1 主なフィールド調査参加遺跡

表1 古代エジプト史年表

先王朝時代 Predynastic Period	ca. 5500–3100 BC
初期王朝時代 Early Dynastic Period (1–2dyn.)	3100–2686 BC
第一中間期 First Intermediate Period (7–11 dyn.)	2181–2055 BC
古王国時代 Old Kingdom (3–8 dyn.)	2868–2160 BC
中王国時代 Middle Kingdom (11–14 dyn.)	2055–1650 BC
第二中間期 Second Intermediate Period (15–17 dyn.)	1650–1550 BC
新王国時代 New Kingdom (18–20 dyn.)	1550–1069 BC
第三中間期 Third Intermediate Period (21–24 dyn.)	1069–747 BC
末期王朝時代 Late Period (25–30 dyn.)	747–332 BC
プトレマイオス朝 Ptolemaic Period	332–30 BC
ローマ時代 Roman Period	30 BC–AD 395

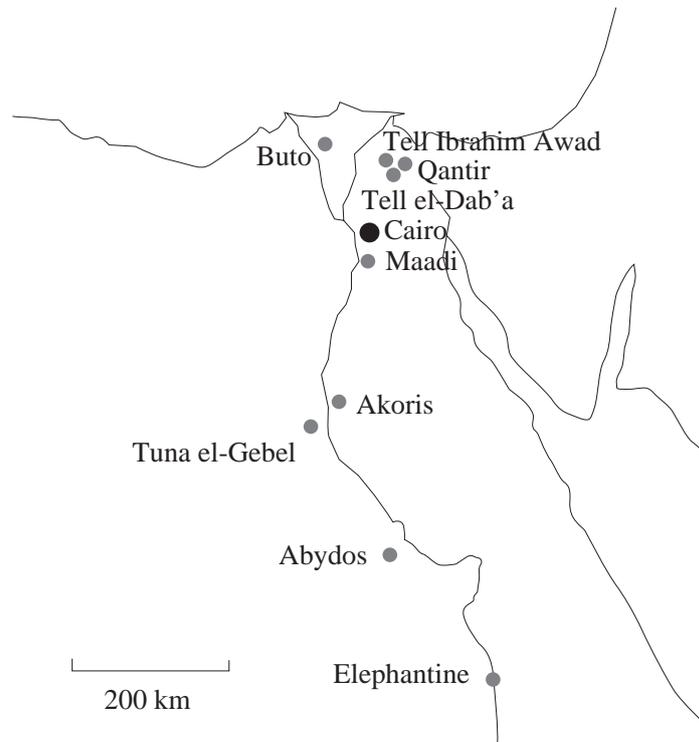


図2 エジプト フィールド調査参加遺跡

の性質（集落、墓地遺跡、神殿等）により興味深い相違点があります（表2）。先王朝時代の方が王朝時代よりも野生動物の割合が概して多く、王朝時代に入ると家畜が殆どになります。立地に関しての差異は、水辺に近いデルタの遺跡では鳥類の種類が多く出土する傾向があります。しかし、立地（現在は無いが、当時遺跡近隣に池/湖があった）や性質にも関係し、動物カタコンベのトゥナ・エル・ゲベル遺跡は中エジプトに所在するのですが、これまでのところエジプトで一

番鳥類種が多く出土した遺跡となっています。魚類についても、ナイル川上流に位置するエレファンティネ遺跡では、下流の遺跡に比べて個体も大型で、魚種も多く、残存状態も良好です。また、集落遺跡では家畜の骨が圧倒的に多いのに比べ、墓地遺跡では食物残滓は多くなく、骨も骨角器（副葬品）や供献用供物として出土する傾向があります。

表2 エジプト フィールド調査遺跡概要

遺跡名	時代	特徴
エレファンティネ Elephantine	先王朝時代～ ローマ時代	集落・神殿、特に紀元前2000年紀からクヌム神殿（ヒツジを奉った）は継続的に増改築。動物遺体は食物残滓が多く、他の地域の遺跡に比べると魚類の豊富さと大きさが特徴的。哺乳類は家畜に混じって時折野生動物が検出される。
アビドス Abydos	先王朝時代・ 初期王朝時代など	オシリス信仰の聖地として知られている。アメリカ隊とドイツ隊がそれぞれ調査している。ドイツ隊は末期先王朝時代の墓 cemetery U と先王朝時代のナカーダ期の周辺の墓を発掘、初期王朝時代の王墓の再クリーニング・修復をしている。支配層の墓域なので検出される動物遺体も集落跡とは異なる。家畜はウシ・ヒツジヤギが恐らくは来世への副葬品として、また王墓の周りの小房 (small chambers) には遺物が取められ、その中には埋葬された犬や、若いライオンも発見されている (Dryer et al. 2000)。特筆すべきは、非常に洗練された骨角器である。
トゥナ・エル・ゲベル Tuna el-Gebel	紀元前7世紀～ 紀元後1・2世紀	動物カタコンベ。広大なカタコンベで、元々はトト Thoto 神（聖獣トキとヒヒ）にささげられていた。膨大な数のトキのミイラや、その他の動物が検出されている (von den Driesch et al. 2004)。プトレマイオス朝のプトオシリス神殿やグレコローマン時代の墓も付近に存在する。
アコリス Akoris	古王国時代～ AD700年	検出される遺構の最も古いものは第5王朝古王国時代の岩窟墓で、中王国時代の墓もあるようだが、はっきりとした集落 (city area) は第3中間期からAD700年まで続く。遺跡は大きく、集落跡、ネクロポリス、石切り場、農業区域に分かれるようである (Kawanishi & Suto 2005)。動物遺体150点程度を同定したところ家畜 (ウシ・ブタ・ヒツジヤギ) とロバ (少数) が検出された。淡水魚類、貝類も数は限られるが検出された。鳥類の骨はサンプル中には無かったが、羽根片は目についた。野生動物は、哺乳類はなく、爬虫類でアフリカン・ソフトシェル・タートル (Trionyx) の甲羅とナイルワニの歯と思われるものが含まれている。
マアディ Maadi	後期先王朝時代	集落跡で楕円や変形楕円の泥・枝の住居、貯蔵穴などが検出される。土器80%がローカルのものだが、輸入土器 (パレスティナや上エジプト産) も混在する。銅 (シナイ産) や土器以外のパレスティナの遺物も見られることから、当時の交易の拠点の1つといわれている。輸送手段として重要なロバの骨が出てくることから裏付けられている。マアディが現在のところ (家畜) ロバが出土するエジプトで最古の遺跡。動物遺体は全体的な傾向として、既に家畜が定着しているようで、野生種の哺乳類の割合は、先王朝時代初期のデルタの遺跡 (メリムデ・ベニサラーマ) に比べて減少している。動物性蛋白質は家畜を飼いながらナイルの魚からも摂取していたことが伺える (Boessneck et al. 1989)。
テル・イブラヒム・アワード Tell Ibrahim Awad	後期先王朝時代～ 中王国時代	下エジプトで最も古い神殿 (初期王朝時代～) が検出されている。神殿東には墓域 (ネクロポリス) もあり、中王国時代 (20体) と第一中間期 (36体) の墓が発掘されている。副葬品は比較的貧相で、ビーズや土器が副葬され、神殿域からは各種土器・ファイアンスのタイル・小像、象牙製品などの奉納品 (votive goods) が発掘された。
プト Buto (テル・エル・ファッライーン)	後期先王朝時代～ ローマ時代	地名はギリシア語の Boûto と由来。古代エジプト語では、蛇 (コブラ) の守護神を持つ Per-Wadjet と呼ばれていた。墓域・集落・神殿などが発掘されている。先王朝時代の層はまだそれほど検出されていないが、上下エジプトの統一前に上エジプトの土器型式が出土し、上エジプトとの関係が示唆され、統一自体の重要な手がかりになる遺跡なのではないかと考えられている。動物遺体は主に家畜の骨で、野生動物はカバ歯や稀にハーテビーストが見られる程度。水に近い遺跡の立地から、鳥類の種類が非常に多く見られたのが特徴的である。恐らく水辺での野鳥狩りも貴重な動物性蛋白源だったと考えられる (von den Driesch 1997)。
テル・エル・ダバ Tell el-Dab'a	中王国時代～	ヒクソスというアジア系異民族が侵入した第2中間期に Avaris と呼ばれヒクソスの首都となる。有名なのは、エーゲ海文化との繋がりでミノアスタイルの壁画のフレスコ画 (bull-leapers) が発掘されている。この遺跡では既に約7万点の動物骨が出土している (Boessneck 1976, Boessneck & von den Driesch 1992)。出土遺体は家畜が殆どであるが、中にはロバの埋葬や in situ で南方 (北スーダン) との交易によって持ち込まれたと考えられるアヌビスヒヒが検出されている (von den Driesch 2006)。

### カンティール Qantir

カンティール遺跡は現在筆者が執筆中の博士論文の核遺跡です。紀元前13世紀ラムセス二世というファラオの時代にこの地に首都が置かれ、遺跡はピラメセ Piramesse (“ラムセスの家”を意味する)とも呼ばれています。この地域は、東地中海地域、レバントへの通路となる地域で、政治的・経済的に重要な地域でした。遺物包含層のある時代は長くなく<sup>2)</sup>、およそ新王国時代から第三中間期(18王朝前半から21王朝初期)です。遺跡内での首都エリアは10km<sup>2</sup>に及び、これまで主に4エリア QI, QIV, QV, QVII の調査が行われました。

表3 カンティール遺構概要

発掘区	遺構概要
QI	工房(青銅・木製品・骨角器など多目的), 馬車場, 軍事施設, 中庭
QIV	工房(ガラス), 厩舎, 宮殿的な遺構
QV	建造物遺構(行政関連建築物? 磁気探査による推定)
QVI	神殿, 聖域(? 磁気探査による推定)
QVII	建造物遺構 A・B



図3 カンティール遺跡地図  
(Bietak 1984: 137-138)

QIの発掘は、1980年から1987年に行われ、18-19王朝の馬車場 chariotry, 工房域, 軍事的施設が検出されています。QIV区, Ezbet Silmy と呼ばれる村の南は、9層(A1/2/3, Ba/b/c/d, C, D)が確認され、特にB層(後期19王朝から初期20王朝)ではガラス工房, 馬場, 王宮の様な遺構が確認され、馬車に関連する遺物も多く見つかっています。QVでは、磁気探査の結果、行政関連施設と考えられる8000m<sup>2</sup>に及ぶ大きな建造物遺構の存在が分かっています。QVIIでの磁気探査と発掘では、用途は(現在のところ)不明の2つの平行した建造物遺構AとBが検出されています。2003年にはQVIIからヒッタイトとラムセス二世時代の外交関係を表した楔形文字の粘土板片が出土しています。さらに磁気探査により幾つかの小神殿と聖域, ラビリンスの様な遺構, 集落域, 王宮の様な建造物遺構の一部, 神殿複合体, 列柱室, ペルシアック支流の推定される埠頭と港が推測されています(Pusch 1993, 2000)。

この遺跡は近隣諸国との取引による遺物も残存しています。楔形文書のほかにヒッタイト式の盾型7点も出土しています。カデッシュの戦いの後、ハットウシリIII世との和平条約, ヒッタイトとの交流が増え、ヒッタイト職人が一部カンティールに住んでいたのではないかと調査主任は考えています。その他、ミケーネ式土器(Mountjoy & Mommsen 2001)や、エジプトの南方の国々との動物交易(von den Driesch 2006)の存在も知られています。

カンティールの動物遺体に関しては、2005年までの調査で、約14000点が分析されました。哺乳綱88%, 貝類は7.1%, 鳥類・魚類はそれぞれ2%程度となっています。同定された哺乳綱は約7000点で97%が家畜でした(Kitagawa in prep.)。家畜は、ウシ・ブタ・ヒツジヤギ・ロバ・ウマ(ラバ)・イヌが出土しています。圧倒的にウシが多く、次いでヒツジヤギ, ブタと続きます。ウシには若い個体も多く含まれ、子牛の肉も食されていたようです。ブタはエジプトの多くの遺跡で頻度は異なりますが出土し、特にデルタの遺跡はブタの生息に適した土地であり頻繁に出土します。近隣のテル・エル・ダバ Tell el-Dab'a 遺跡でも多く出土しており、発掘区域によって頻度の差異がみられます(von den Driesch 2006)。新王国時代の遺跡アマルナでも、王宮域と、職人村 workmen's village でブタが出土する割合を比べると、職人村の方が明らかに多かったという研究もあります(Luff 1994)。

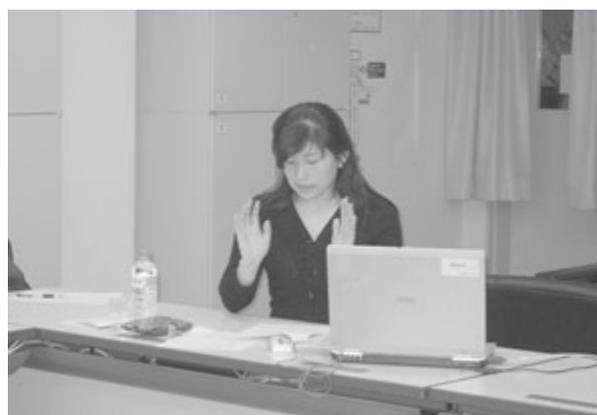
野生動物(哺乳綱)については、この遺跡では出土

数があまり多くありませんが、興味深い分析結果となっています。遺跡付近には生息しない交易によってもたらされた動物（ライオン、キリン、ダマシカ）の存在です（Boessneck & von den Driesch 1982, von den Driesch 2006）。ライオン・キリンは恐らく南方から、シカは西アジアかギリシアからもたらされた可能性があります（Kitagawa forthcoming）。

さらに、動物遺体から垣間見える興味深い点は、骨角器の存在です。動物遺体の中に、約450点の加工痕のある動物遺体が発掘されています。その多くは大型家畜、ウシとウマ科の動物の骨を利用していますが、加えて68点の貝類も同定されています（Kitagawa in press）。加工痕のある骨はQIに集中しており、他に青銅・革・木製品などを加工した工房跡ではないかと考えられている区域が発掘されています。骨角器は、完成品より製作過程で出る廃棄物としての骨や、未製品、そして製作する道具も同伴しており、QIにおいて多機能な王宮工房が存在していたと考えられています（Pusch 2000）。

#### 今後の研究展望

上記のように、自然環境や時代を異にする幾つかの遺跡出土の動物遺体を分析、比較することによって、当時の通史的な動物利用の変遷を追うことができます。考古学的コンテキストによっても出土動物遺体の構成・比率は興味深い差異を呈します。筆者のこの先1～2年の研究課題は、先ずカンティールのデータを元にして、エジプトのデルタ内で動物遺体の報告がされている全ての遺跡の動物利用を時空的に研究することです。例えば先王朝時代と初期王朝時代の遺跡を比較しエジプトでの家畜の広まり（野生哺乳類の減少と家畜種の増加・ロバの利用）や、同時代の遺跡間の家畜種の相対比率の比較などは、当時の自然環境にも関わってくる問題です。まずはデルタの遺跡を手がかり



に、これまで以上に当時の社会への理解を深めたいと考えています。

### 3. 日本の大学院教育に対する評価・提言

#### これまでの研究拠点

博士後期課程在学中に筆者が所属していた研究機関は、名古屋大学大学院（人間情報学研究科博士課程）、Institute of Archaeology UCL (University College London, University of London, Master of Arts), Institut für Paläoanatomie und Geschichte der Tiermedizin, Ludwig-Maximilians-Universität, München (program student)です。海外の上記研究機関を選んだ理由は、動物考古学、エジプト学ともに日本で体系的に学べる研究機関がない（無かった）ためです。UCLの選択理由は、英語圏で大きな考古学研究所があったことが第一に挙げられます。様々な専門の考古学者が集まっているので、多角的に研究できるのではないかと考えました。UCLで修士課程を終えた後、エジプトでの動物遺体をより深く学びたかったので、エジプトの考古動物学研究の伝統のあるミュンヘンの上記研究所で研究を続けることにしました。この研究所はドイツ語圏（ドイツ・オーストリア・スイス）のエジプトでの発掘で出土する動物骨を1970年代後半から一手に引き受けており、様々な遺跡の動物遺体データの蓄積はこの研究所にありました。さらに、現世標本も哺乳類だけでなく鳥類・魚類・貝類など非常に多く揃っています。先代・先代の教授は、エジプトだけでなく、西アジア・西欧・南欧・北アフリカ・ネパールなどで多くの研究業績を残していらっしやだったので、比較資料も豊富でした。

#### イギリスとドイツの大学院教育に対する所見

上記研究機関に在学した経験を基に、大学院教育に関しての所見を述べたいと思います。同じ大学内でも各専攻により違いがあり、下記は自分の所属研究所に関しての情報になります。筆者はイギリスでUCLのコースワークが定められている修士課程（MA: Master of Arts）という課程に在学していました。考古学では早ければ1年でMAという学位が取得できることになっています。MAのコースワークは、授業が週に3科目あり、学位取得のために各科目につきそれぞれ3本のエッセイ（小論文、各3000ワード）を書くことが課せられていました。よって合計で9本のエッセイと9月提出の修士論文（1万～2万ワード）が提出義

務でした。入学して直ぐにシラバスと、毎回の授業の前に読んでくるべき論文・本の「リーディングリスト」が学生に与えられます。授業ではそれについて議論するので、読んでくる事が前提でした。リーディングリストは毎回かなりの量で、それが毎週3授業分になりますので、多量の文献を読まなくてはなりません。エッセイは毎回3つ程のテーマから自分に書けそうなトピックを1つ選んで書くのですが、テーマそのものは各時期の授業と大きくは重なるにしても、小論文を作成するのに読むべき文献が授業で読むべき文献と必ずしも重なっていない事が大変な点でした。

イギリスの修士課程で良かったと思う点は、決められた時間内にすべきことが明確に分かっているということです。例えば、ある分野のあるテーマでは何を読むべきか、その分野では何が問題となっているのかという情報が教員から与えられるので、研究分野についてまだ深い理解のない学生でも、膨大な情報の中で何をすれば（読めば）よいか分かり、迷子になってしまうことはないように思いました。逆に、これが短所でもあると思います。UCLの考古学修士システムは枠組みがきちんと定められていて、日本の学部のように出席もとりません。上記のコースワークも含めて、学生の自主性というのはどれほど重んじられているのかやや疑問に感じました。修士課程は人数が多いのでそうなるのかもしれませんが<sup>3)</sup>。

ドイツの大学システムは、アングロサクソンの国や日本とは違い、学士・修士・博士ではなく *magister/diploma*, *doktor* になります。マギスタはよく、学士と修士の中間程度とも、修士程度とも言われます。マギスタを取得するには最短でも4年半、6年かかる人も多いと聞きます。2005年以降、大学に在学するには学費がかかるようになりましたが、それまでは無料でしたので、学生が長く大学に所属すればそれだけ予算もかかるという経済的な問題もありました。しかし、2010年までにヨーロッパの大学制度を改革するポローニア宣言 (Bologna Declaration) がヨーロッパ29カ国により誓約され、欧州内の大学に国際競争力をつけるための改革 (学位を学士・修士・博士にすることも盛り込んで) を進めるようです。学士だけで卒業したい人は、より短期間で卒業できますし、またこれまでは制度の違いで学位を取った人には、ドイツで博士号を取るのに諸手続きが必要でしたが、学位を統一することによって横に動きやすくなるという利点もあるようです。

授業は、日本のように講義形式のもの、ゼミ (セ

ミナー) 形式のものがありました。イギリスとは違い、いつまでにこれを読む・書く、という締め切りに追われるタイプではなく、学生の自主性を重んじるシステムだと感じました。良い点は、やはり学生が自分の頭で考える余地を残していることだと思います。悪い点は、イギリスの長所のまさに逆で、多くの情報の中で何をしてよいか分からず迷子になってしまう学生もいるのではないかとことです。もちろん、教員は、学生が質問すれば個別にアドバイスをしますが、人によっては時間に流されてしまい長い年月学生でいるというケースも見られるようです。

#### Think globally, act globally<sup>4)</sup> 日本における大学院への評価と提言

日本の大学はどちらかといえばドイツタイプに似ているように感じます。学生の自主性を重んじるのは良い点だと思います。筆者はこのゆとり型の大学院教育のお陰で、授業の無い日は、実践 (遺跡調査) に行つて多少なりともフィールドの経験を積むことが出来ました。とはいえ、上に述べたイギリス式の忙しい修士課程は、短所もあります。学生にとっては効率よく学べ、さらに希望があれば博士課程でじっくり研究することができるので、修士課程ではそれくらい詰め込み式でも良いかもしれないと現在は考えています。ただ、その場合多くのエッセイ (レポート)・修士論文を採点する教員側の負担が大きくなるので、その点をどう解決するかというのはひとつの問題です。

また、「国際競争力をつける事」というのはドイツの大学改革について話すときよく耳に入る言葉ですが、これは日本でも同じだと思います。博士課程頃から国際学会・研究会での発表と、外国語での論文発表 (出版) は研究者としてのキャリアを築いていくために、自分の研究に適した研究機関で研究する機会を作るために必要だと思います。しかし、一学生がいきなり自分の成果を発表しようと思っても、中々難しいと思います。それを、大学院側 (研究室: 教員・同僚) が多少なりともサポートできる体制になっていれば、最初の一步がよりスムーズに踏み出せるのではないのでしょうか。具体的には下記の案 (既に取り入れられている事項もありますが) を提言します。

- ・国際学会・研究会への関心を高める——情報 (ポスター等) を学生の目に付くところに提示し、学会の発表原稿募集のメールを受け取ったら発表する・しないに関わらずゼミ内のほかの学生に転送するなど。



- ・研究室内で、関係学会のプロシーディングスを買う・必要に応じて輪読する→関係分野で焦点となっているトピックを話題にし、学会動向をアップデートする。
- ・外国語論文を読む機会を持つだけでなく、博士課程に入ったら修士論文をまとめるなどして外国語で書いてみる。
- ・研究計画の中で優れたものを選択して、補助を出す(文学研究科が取り入れている案)。
- ・小さめでも1年か2年に一度、外部の研究者・院生も混ぜた研究会を開く。

ゼミ発表も良いトレーニングにはなりますが、面識の無い人の前で発表をし、緊張するのもさらにトレーニングになります。外国のことについて研究していたら成果を国内の研究会・学会だけに留めるのは勿体無いと思います。できれば成果をグローバルに公表し、それについてコメントを貰い、他の研究発表から刺激を受けると理想的です。また、日本に関しての研究でも、海外の学会で発表する事は素晴らしいことだと思います。例えば、筆者が以前に参加した骨角器研究会は、様々な国の研究者が骨角器という遺物だけつながっている研究会でしたので、地域で(日本と外国とを)分かれるものではありませんでした。さらに東アジアの骨角器や研究状況に関心を示す研究者もいました。それと同様で、日本の事だから外国では発表しないというものでもなく、知に国境はないのですから、国際研究会・学会のような場で様々な考え方を吸収し、自らも発信していくと良いと考えています。

#### 注

- 1) 動物考古学 zooarchaeology は主にバックグラウンドが考古学にある場合で扱う遺物は動物遺体ですが研究焦点は人間に比重が置かれ、考古動物学 archaeozoology は自然科学系専攻(動物学・獣医学・生物学など)をバックグラウンドとし、

人間と動物の関わりを通して、動物が人間に利用されどのような影響を受けたか等、焦点は動物に置かれていることが多いです。傾向としては、大陸ヨーロッパの国が行う調査では伝統的に出土動物遺体は考古動物学者が分析していたことが多かったように見えますが、少しずつ変わってきているようです。

- 2) 川や運河の流れの変化と農業地帯による耕作により遺跡が攪乱されたり、上層が削られたりして包含層があまり厚くありません。
- 3) 博士課程では人数が随分減り、チュートリアルという1対1の定期的なミーティングがありますので、修士課程とは異なります。
- 4) トン・フロイエンスティン「ヨーロッパにおける大学評価の新段階」日本私立大学協会講演記録(2002年8月6日)、30頁(<http://www.riihe.jp/series/13yonezawa.pdf>)。

#### 参考文献

- Bietak, M. 1984. Ramsesstadt (Piramesse). —*Lexikon der Ägyptologie* V: 128–146.
- Boessneck, J. 1976. *Tell el-Dab'a III. Die Tierknochenfunde 1966–1969*. DÖAW, Wien.
- Boessneck, J. 1988. *Die Tierwelt des Alten Ägypten*. München.
- Boessneck, J. & v. d. Driesch, A. 1982. Studien an subfossilen Tierknochen aus Ägypten. *Münchener Ägyptologische Studien* 40. München.
- Boessneck, J. & v. d. Driesch, A. 1988. Tierknochenfunde von Tell Ibrahim Awad im östlichen Nildelta. in v. d. Brink, E.C.M. (ed.), *The Archaeology of the Nile Delta- Problems and Priorities*: 117–122, Amsterdam.
- Boessneck, J. & v. d. Driesch, A. 1992. Weitere Tierknochenfunde vom Tell Ibrahim Awad im östlichen Nildelta. in v. d. Brink, E.C.M. (ed.), *The Nile Delta in Transition: 4th–3rd Millennium B.C.*: 97–110. Jerusalem.
- Boessneck, J. & v. d. Driesch, A. 1992. Tell el-Dab'a VII. DÖAW, Wien.
- Boessneck, J. & v. d. Driesch, A. 1997. Tierknochenfunde aus Buto. in v. d. Way, T. *Tell el-Fara' in Buto I*: 206–216. Mainz.
- Boessneck, J., v. d. Driesch, A. & Ziegler, R. 1989. Die Tierreste von Maadi und dem Friedhof am Wadi Digla. in Rizkana, I. & Seeher, J. *Maadi III. The Non-Lithic Small Finds and the Structural Remains of the Predynastic Settlement*: 87–128.
- Driesch, A. v. d. 1976. *A Guide to the measurement of animal bones from archaeological sites*, Harvard University, Peabody Museum Bulletin 1.
- Driesch, A. v. d. 1997. Tierreste aus Buto im Nildelta. *Archaeofauna* 6: 23–39.
- Driesch, A. v. d. 2006. Ausgefallenes Wild in Pi-Ramesse (Qantir) und Auaris (Tell el-Dab'a) und seine Kulturgeschichtliche Ausdeutung. in Czerny, E. et al. (eds.), *Timelines Studies in Honour of Manfred Bietak* vol. III: 319–315.
- Driesch, A. v. d. & Kitagawa, C. (in press.). Bericht über Tierknochenfunde der Grabungskampagnen von 2000 bis 2005 in Buto (Tell el-Fara'in). *MDAIK*.
- Driesch A. v. d., Kessler, D. & Peters, J. 2004. Mummified Baboons and other Primates from the Saitic-Ptolemaic Animal Necropolis of Tuna el-Gebel, Middle Egypt. in Gisela, G. & Peters, J. (eds.). *Documenta Archaeobiologiae* 2: 231–278.
- Dreyer, G., Driesch, A. v. d., Engel, E.-M., Hartmann, R., Hartung, U.,

- Hikade, T., Müller, V. & J. Petres. 2000. Umm el-Qaab. Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof. 11/12. Vorbericht. *MDAIK* 56: 43–129.
- Luff, R.M. 1994. Butchery at the Workmen's Village (WV), Tell el-Amarna, Egypt. in Luff, R. M. & Rowley-Conwy, P. (eds.). *Whither environmental archaeology?* Oxbow Monograph 38: 158–70.
- Kawanishi, H. & Suto, Y. 2005. *Excavation at Akoris in Middle Egypt vol. 1, Amphora Stamps: 1997–2001*.
- Kitagawa, C. (in press). Beyond the Household Activities, *Proceedings of the 5th meeting of the (ICAZ) Worked Bone Research Group, Velico Turnovo, Bulgaria 2005*.
- Kitagawa, C. (forthcoming). On the presence of deer in ancient Egypt.
- Kitagawa C. (in prep.). *Animal Economy at the New Kingdom Capital of Piramesse/ Qantir (North-eastern Delta, Egypt)*.
- Mountjoy, P. A. & Mommsen, H. 2001. Mycenaean Pottery from Qantir- Piramesse, Egypt. *The Annual of the British School at Athens* 96: 123–155.
- Pusch, E. B. 1993. Recent Work at Northern Piramesse, in *Fragments of a Shattered Visage: The Proceedings of the International Symposium on Ramesses the Great [1991]*, Monographs of the Institute of Egyptian Art and Archaeology 1, Memphis, Tennessee, erschienen: 199–220.
- Pusch, E. B. 2000. Piramesse. *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 3: 48–50.
- Reitz, E. and Wing, E. 1999. *Zooarchaeology*. Cambridge.